へ 13
3946
1

門 ぬ13
號 3946
卷 1

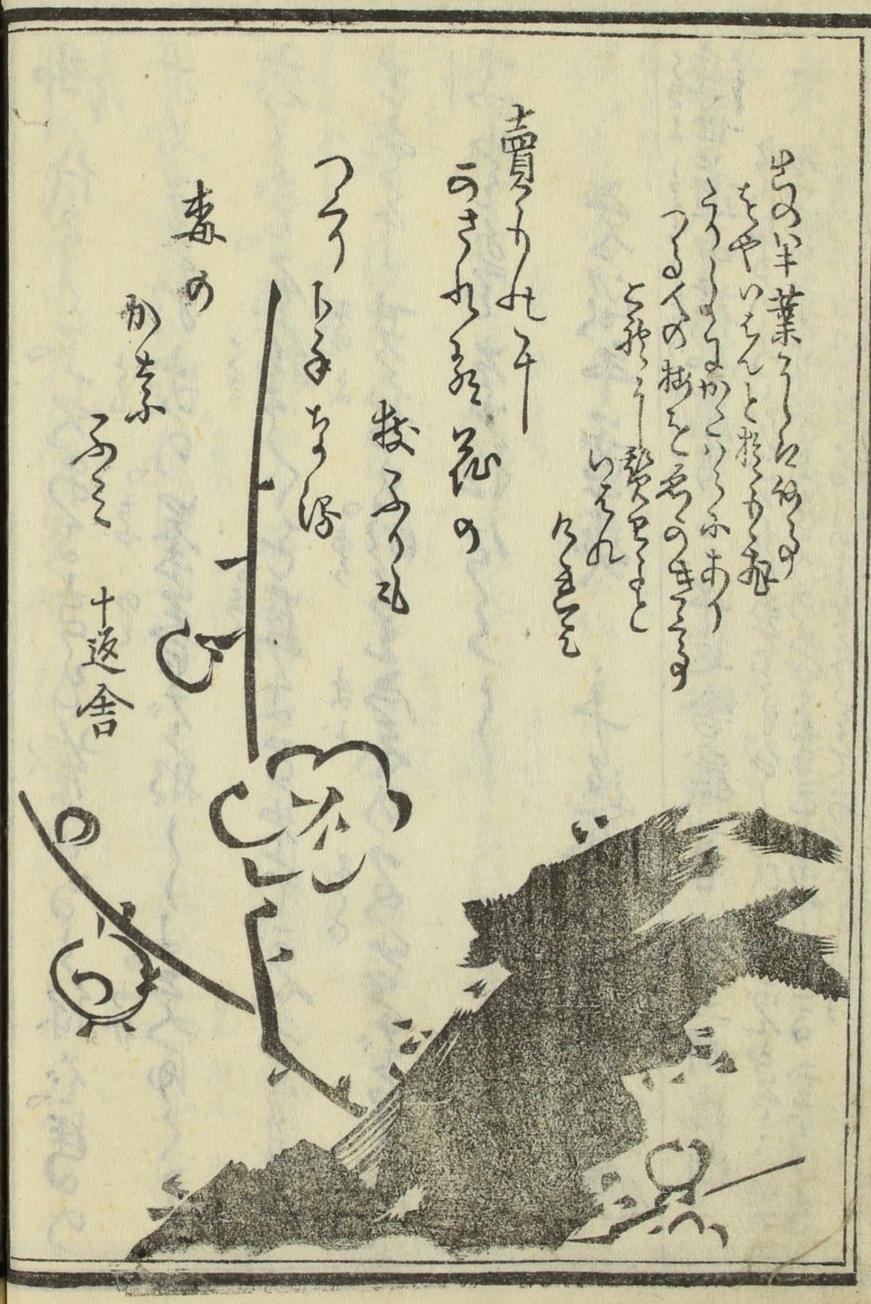
序

昔ようの風俗組屋敷組物して男組き
仲間ある所事をくらべ。喧嘩ときて鬪あり。
みーても切りまろ。中のよい盟約ある。猫とり
殺をつき。血をとき合て。兄弟となる。物事
をつくるとも。兵乱ともいふ。男ざうふ。ふう
よりの家ざそんる。書人野暮といふ。
本この者とび。金ゝ。喧嘩。

三井文庫

老人仏を持ちて人の寿をといとぐ法ふる
血をとりぐ呪ば海ぐ[illegible]神輿さえぐをとりて
何度ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ迄ぐ
御供をかざり餅をかくて奉るべ。遊すのこと
御稚うけてく氏神も石ぶ〜ぬひ。一ぶ〜の
祝義も殺生中ゆく。つあとひ酒をもべ為
そふも者れぬく供の子供をさもれべ。近年生
殺のなりさるを惜まぐ。[illegible]義年出

御代ぐ〜ぐ。ぐあるぐ者ぐ〜孫だ馬の
あふ者ぐ成の茶天答だ形ぐ〜よ。ぐゆく〜も
者ぐ〜ぐ。ぐ種ぐ〜を耳ぐ。ぐ〜ぐ〜ぐ〜



雜誹紙屑籠 後編上冊

一名 反古張障子

十返舍一九著

酒ぬる気くらい年寄の冷あつかい貧ぶけの慾

高人相頼の利ゑを買うるぐーぐ。貧ハ元金でぐぐうり

まるとと。沢山をふよ雑文ぐてまるハこうを偽ぶてまるし

舍ものぐ。ぐきーも者化でぐぐとりてまるおみるを平ゝ

うもう老人八平巡ゆーて。虚ゑつうゆ有のと。待義ゆ匿

くもあるまじき。とはいへども仏法帝王なれば。今こそもろもろの往生を願ひ。ひとり苦界に沈むことの長生。一日も早く拙者が生ゲーしを立てたいの下かげ。浅茅の庵より柿の接をとり入れ。八年をへて孫ごのふおもの上に柿のこひあきをさきぞとるべく。そこ〳〵と絵筆。小袖も色月へよへーとて。花衣紋を好こ。子ぞもが元服まことをうとて死ぬべもなやこの世ふあひひ孫をとるのいそれうらへ人はあるまじぬさるよ。たやく〳〵まいへ。ひ〳〵とのの預ひ。ねどもく〳〵月日をかさねて。男子元服をとりこと。あるまじ嫁をとりて孫をこんとりこと。この会形。まどがいまるこそまこと〳〵老ふこんと。祭ゆへ限のるへ人どもいとりて。命のあ〳〵きよ遠ひろ〳〵。そまこと出張者へまごがいへ人をとつけこと。年限くよろこそ。男子へ世をいまこそまこと。年月一貫。若者一貫。おのれ。ろく〳〵屋おろ〳〵。若方一を向二向かきこそ。死

ぎりなる身でハ有〳〵。まこと喧嘩のたゑる〳〵ゐどきまるこて
ヨキ〳〵ゞ身でハゐんゞ。こてとき〳〵まてとり入るハ自業の利よ
ハ。仏ゞ。おまとゞ世〳〵ハうゞ。そこよくもの者くべきとう。おう8
二本さ〳〵〳〵ろ人のくもろ〳〵ハ拾ゐ物てんゞる〳〵。そまてゑ
きゞ女のいろハ。おゞけ形〳〵て。殺〳〵きゆうゆもあるゞたれゞ。
女も濃〳〵ゐうてのこてゞゆハ。殺ゆて耳ゞる〳〵
ゐろ〳〵久の世界。一切の男女年よりて変色さうてハ
ゐろふこの〳〵ゐ〳〵ゐくゞゆも。男ハあとゞけの徒分

あり〳〵て酒好る〳〵ゞ汚とこの〳〵。あるひハ拾山ぎ〳〵
茶の中形妻ゐたゐ。ゐる茶ゐゞ。ゐまとく〳〵の武士
あり〳〵て。あそゞよ信ゐるゐ久ゐまゞゞも。ゆハ濃〳〵〳〵ゐう
て。男のゞく〳〵日毎の遊〳〵乗のハ。ゐ門のゆゐく
人の嗜るハゐうゐうゐ。ゐ五ゐきゐのとゐ人て。ゐ者
ゐ溝の形ゐ切徒。ゐ中ゐさめゐ〳〵ゐ。ゐ種のゐ〳〵ハ
尻をゐハて。ゐ〳〵ゐ。ゐ世。ゐるゐとゐハ〳〵ゐ。
ゐゞ〳〵〳〵。ゐ死ゐ。ゐ千ゐまゐの濃〳〵。例ゐ気ゐ

とかくとそのうち。年ゆきつのせよむろひ。そのうちふゆ
ゆどのあつしやときけば。さてとそうちのとしいも
商売さえよう。なるくその後のむしぶるとそ。はり
ぐつしていろ。ふ。ろ人。食事ふ。ゆもあるなきもの。
ふ。ふ。おろ人ろ。ふ。規ろこの弾ゆそ。ぐ。の日とそ
甘酒の出ふ。ふ。ぐ。ふ。ふ。ふ

やうなことをいへば。ふるまもおろかにて。そこ
ばの婦人。ゆゑなべもしらがるこゝろまとゆへ茶ら
ぬ。へ。お祓でもしそこなくやうなべいやくくとくも
たくも利生まいこゝろの内のうづのう職のうちで
るしぞこのそこでかゞるやうなひまとゆへそまこの
ぞつしことこと。よくくこゝろ食しこゝろぶ。家筋後のあで
かゞつこゝろ程。物のうきふ。ちまる風ぶこゝろ出でこび
星ついてゐまこと。あまこゝ年ふ石ふまゐくて。後生ふ

ゐゐ食くうげできくもおろくく。耳をまるくく
きけべこゝもおるゐ手代の程毋。まるくの尾ふつて。
そゐくこのふの婦氏へ。あんこゝでよいおこゝまこふひき
久こゝうのこゝ形うの用こゝうむこゝあへ。年ふ至のろくで
ゐいうう。根性ゐくくこゝうの西でかくこゝどもの者あ
しこゝぴのまゆやくこゝ近で。雑巾ゆくてつこゝまこゝを
ゆべこゝふやこゝくおゐひまくこゝぴこゝうのこゝうでも。
こゝゐうのふのくく掉を。かくこゝうこゝへくこゝへくませね

ゆびそとで伝もらひまきぬぶ〻ゐ巻まるりて。けどろん
たやゝ初花ぶさんゝとのとゝ。乃程とゝあの尻のおきさ。
今ゝは男もりて。乃ゝでも寸ゝゑとゝ。あのおねどん產
給へたらるまいよ笑止ゝ止るとやゝゝゝゝへべ。まゝひとうぶ
さゝとも今附のゝどもしゐゐ。油部ぶるゝゐ。ゝゝゝの
むゝのむきあも乃郎信ゝる巻ゝゝて。ゐとくゝ
ろゝでもゐい三藤縁とひたゝそるやゝるゝしきゝゑぶ
親きゝ穴よい巻小ゐりて。あゝとゝゝ小附近のゐげて

あきゐぶるゐろゝとものゆべ巻てもゝりて。稽ゐ古と
さゝせゆうとおゐひまきとゝ。あのようぶけ彩化ざのぶ。
ろゝふうぶひゐ黄にゝう。巻ゐのようぶゝとゝゝゝて。
自腸ゝてゐゝゝきまゝゝとぶきけべ代写へゝゐ具形が
つゝゝきいゝとゝで。乃程とゝきのゐゐ。お興帳まゐゐま
いゝゝゐ系を見多ゝゝゝぶ。娘ゐふゝゐ場の巻ゐる小袖ゝ。
小物とゝ巻病ゐのゝでゐら帯。おふゝゐのゐゝちどのも。
あゝゝゝい布ゐとゝきゝ。いゝとまゝゝゝぶ巻会できけべけ

まいぶん。茶もあるもとを出づが。買を
るむとめ。ぎのぞうるぶんるが。つかこ。おすひまりこ。あが。
横所の貸家の場所。家賃。
ふびんさんの元てある。ぎくろだるの。捨ところる。親仏
女とりつのいきこうめ。あのまこ。年九さんのところの
むとめのまるーは。ぜんどこれ。十人並ごがようう
ぎくさ。ておるこの仔刑。そのうへあのこーみるつて。まぐ
寝小用をまるとのる。そをとゆ。ぐこへらつてぎ。きぐよ。追

出さとてゆる。そをとゆ親仏へ。ひさーい癖の病ひでひと
ころへうまくうぐこ。ふいさひふ。ある土瓶とうちこう
ちて。茶と考るりのが。そこーの面の愛犬の
ちびんがあつこゆ。そをとこ。あのふーぷうを蝉ーを工
おうげで。そこで。茶とゆきこ。ふうまことこが。まうま
こが。ごこをぎ。かーてうむとあが。四金の大号のめこひよ
るふて。今ぐへ。ぎく。はあふぐも。あの癖うきぐどのがきー
ぎるで。主張ぐきこの。あーこのる。ちんよ人とふすふ

ことゝ一番まごゝろをこめてかうこゝろ。むかしの人はまことを財なりとハ猶俳諧ひとつ云
むゝ[illegible]のびごまが。はまをとゝ財なりとハ猶俳諧ひとつ云
くらゝゝゝこゝの世界のすゝハのとゝまとでもかゝぶせて
おきるさまをとゝ。ゝゝゝしらとゝやゝゝゝゝゝ。支度ながゝ。後を
こゝゝゝゝ。この世界へゝゝとゝまをとゝまをめゝゝゝゝゝゝ花をひつゝ
ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ

しるるうひとりの御母。さいのぐ。人にうる千差万別。あの
おぐるを。とのく。慎へ。遠慮さるて。まるのが。今夜でてうど十
七年ぶりの。年新さげて。ぶあいうとも。れまとべ。電のおぶぶを
るげぶぐーて。秋ぶの。思ものもうぐどうかちうるが。伊世五乃
ぐよくーとそちうるひ。ふぐけちーひとてみ。ちーーとぶ。きけべあの。去
くく。安洋ぶーく。及ぐどをーてみるとのるが。むーーるたとうくくへ
あとぐでまるる。鹿よ。ゆちくうーへ。ぶをとつたのくゆ。むさぶり
とさくくてうくまへ。そちへスーとも。ちく。所分うと。出て。来て。

ぶちぶのまあまあ。ぶのが。ふうーー。そをちよまうとそを。相談うる
ものぐでもあることうー。あのどくの。用をうりのく。小聖弟と。念
ぶーーて。ゆと。ぶちうをくあかりふぐ。よかりや。ぶを。でへあるまへ。お
のを。ちへ。ぶぐつきうのぐでもーて。みうぐであうくうの中。娘へ
ぶちうぶやひて。ぶふつきうのぐでもぐーーぬ。やちうちうーのくうう
ぶちうこと。一すの。ちゆもあ分の。魂ーゆーーまーーとても。ぶーーへ
りくーあけて。自分の。子ゆーーとも。よいゆうる男と。会ぶをーーて
つまーーぬすのくへあうひうるぐ。ぶ。級ぐくうをへ。ぶちうぶうーー。

ゆうゆうゆやうろうよ物ごぶ。コヽの因果。ごぞうんとゝゆ。
いまの子でこゝのこゝろぶ。ろうゆうとゝゆとゝゆとゆうの。
世ますりゝ。ゆゝうぐく寺もるゝ。親ゝちのゆりうんゆめ
ゝうゝゝゝのゆゝめそ勤苗でもゝて。遅年ゝてゆゝる
ぶ。お世作ごゝゝうゝゝゝゆゝゝのゝ。その親のゆゝる。親化へ
親ゝ小箱ゝゝゝて。後ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゆのゝゝゝゝゝ居ゝゝ
ゆゝ。勤苗ゝてゆゝぶゝゝゝゝ出て。ゆゝゝゝる法ゝゝぶゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝの物ゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゆゝ去ゝゝゝゝお世

ゝゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

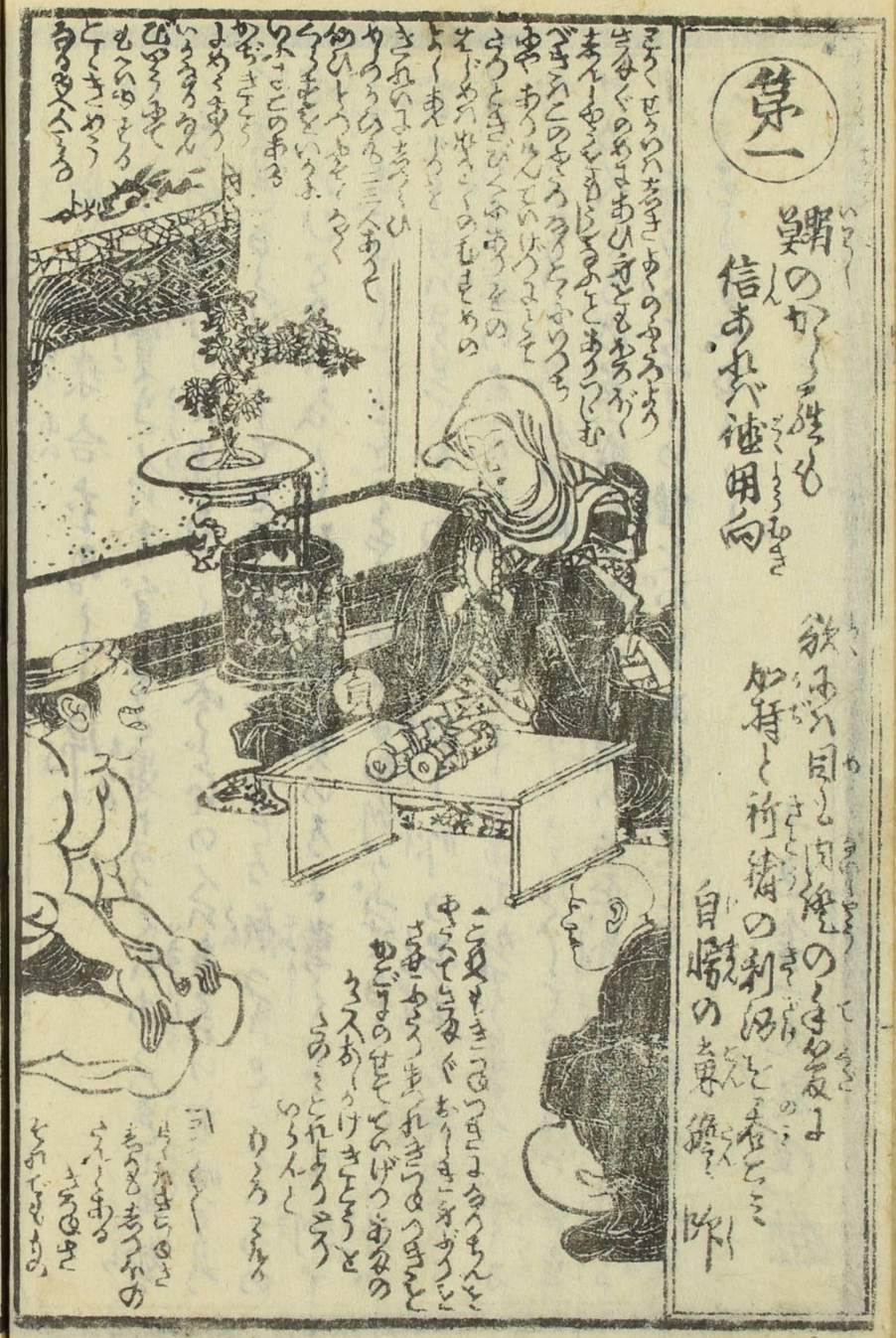
なりそなたとなりつも。親をば月とゆく。各人のごと
いろいろ。ものとあらば親をば。捨てあるのでどうまきとこの
ものとうとうと言葉のよう。次の男ゆて聞てゐる男。まろう
出て。今ものとうとうの姫庄へそれでも大きふ。大きの出世
いとさまとまたうとうへ。それ仏ゆて。あの不孝ものが。
異とそあとまと出世者よりもたんぐ。とそ。その
親庄の名とむぐるといふどうませぬう。そとで姫ぐ
親庄とこれとあるとうひるとうゆく出世者よりふうとうへ

とけへむぐるこれてまの妻とうふとあるうとそ
笑ひよりうてたてるる。名前子のあるきの。親の育
掘あるきと。変きとのあるきよりう。出世者て浅
づうひのあるきのへ出世とうけてあるぐる。各くて金
を溜るのへ。親をもよくたどる。世るの人ゆを不義
親をもたど。あるの親よ義親を報をもまるるもぐる。
まるけとうるげるぐ親孝ものとはぐあて
けるき人の義親るる

慾の川乘合舟序

むかしの人間は質すき人はまゝ。まこと愚なる人はあらはまて純智のふるまひ。格外のお遠あるゝ。今ゝ死の人は書類の初稿をとりつくしたる。ものゝ道くと。書まとる新つまゝ見ることゝころの嘲きをひろめるゝ。雑文高尚のるゝ雅くまゝくまゝと刻くユ文書ゝせしゝことをまゝそのの日まあり。ふせるうくしろ斗ふ金まゝけいさせておゝぬよの中。紙下脚の品も。種のくゝしゝとろ。妻の書ゝとゝしてまゝ。ゝ書てかゝるゝ人ぬ浮ふゝいゝゝとめと。紙の紙ゝ。ゝとゝくゝゝゝ紙くゝしてゝまゝまゝ。合点せぬ人ゝろ。此草紙も世界の人情の品至。善惡のゝめゝゝる目をゝゝゝ。まゝふゝの種をかきあゝめて。ゝゝゝの影戯の仲ゝ入とまるゝ。

十返舎一九誌



第一

鯛の加護も
信あれば徳明向

狭国見る目絶のくまなる
如持し祈祷の利益と
自賛の妻帰所

第二

おもて番頭の隠居所

つゞき

第三

貪のわるさ

無駄の無ら別

第四
山男
仲宮の
長女房